教育協力ウィーク 基礎教育セッション⑨ 多文化共生

「国内及び途上国の事例から学ぶ
外国につながりを持つ児童生徒への教育の在り方」

1. 背景

グローバル化が進み、国をまたぐ移動が活発化した現代において、日本においても在留外国人が増加したことに伴い、外国につながる子どもたちの数は急増している。近年、外国につながる子どもたちの不就学状況が大きな課題となっていたが、ここ数年で日本語指導員や加配教員の配置、在県外国人等特別入試枠（在県枠）の設置等により、高校を含む初等中等課程の就学状況は大きく改善されている。他方、2020 年度の統計では日本語指導が必要な児童生徒が 51,120 人と過去 10 年で 1.5 倍増となっており（文科省 2023)、これらの児童生徒の教育機会の確保に加えて、学習内容の習得促進が重要な課題になっている。

多言語・多文化環境における言語能力・認知能力を高める上での母語の重要性は、学術的にも証明されており、言語習得においては知識の伝達と共にアイデンティティーも深く関わっている。海外では、こうした多文化・多言語を背景に持つ子ども達が持つ「権利」や「国のアセット」という観点から、母語・母文化保持を教育政策に取り入れている（例：スウェーデンの Home Language Reform、オーストラリアの LOTE 教育、カナダの継承語教育等)。

日本の学校教育現場においても、日本語指導や母語支援を通じて生活面・学習面の両面から外国につながる児童生徒を支える取り組みがなされている。他方、これらの取り組みには地域差がある他、日本語指導と教科学習の連携不足等、より効果的な教育・支援の在り方の検討が必要となっている。

本セッションでは、母語・国籍・来日歴等の多様化が進み、グローバル化が進む日本社会において、多文化・多言語的背景を持つ外国につながる子どもたちが、それぞれの能力や個性を伸ばすためには、特に学校現場における教科学習促進の観点から、教育や支援の在り方を有識者及び学校教員等の実務者を交えて検討する。

2. 目的

多文化・多言語環境における教育支援にかかる教育理論、政策及び国内及び途上国での多文化・多言語における教育の先進的な事例を学び、外国につながる児童生徒の教育についての理解を深める。また、教科学習の促進及び子どものウェルビーイングの両面から今後の学校教育の在り方を検討する。

3. 主な対象者

教育協力に関わる実務者（コンサルタント、大学、民間企業、NGO/NPO、JICA 等）

外国につながる児童生徒の指導にあたる実務者（教員等）

4. 使用言語

日本語

5. 開催方法

オンライン開催

6. 登壇者（写真付きプロフィール）

大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻 応用日本学コース 准教授 櫻井　千穂（さくらい　ちほ）	
青年海外協力隊日本語教師(エクアドル赴任)、一般企業勤務ののち、大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了。言語文化学博士。日本学術振興会特別研究員 、同志社大学、広島大学准教授を経て現職。専門は文化的言語的に多様な子どもの言語発達と教育環境の構築。文部科学省委託の言語能力アセスメント開発事業や、東海・関西地域の小中高校でのカリキュラム作り、授業実践、教師養成等に従事。	
岐阜県立東濃高等学校 日本語科担当　国際部部長 和田　さとみ（わだ　さとみ）	
2017 年 JICA 海外協力隊としてスリランカで活動。外国につながる生徒が全校生徒の過半数超える岐阜県の公立高校で、2021 年から日本語教育に携わっている。 外国につながる生徒の教育活動全般に関わる校内外の業務調整をはじめ、高等学校での教育実践に日々取り組んでいる。	

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 運営推進シニアマネージャー兼経理課課長 元ラオス事務所所長 玉利　清隆（たまり　きよたか）	
大学卒業後民間企業勤務を経て、英国の大学院で開発学の修士取得。青年海外協力隊、国連機関、他のＮＧＯ、国際協力機構での勤務を経て、2014 年公益社団法人シャンティ国際ボランティア会入職。2018 年 6 月から 2022 年 8 月までラオス事務所所長を務め、草の根事業「ラオス北部地域の教員養成校指導教官の能力強化を通じた、複式学級運営改善事業」のプロジェクトマネージャーを担当。2023 年 4 月から現職。	
【モデレーター】 東京外国語大学 多言語多文化共生センター センター長／准教授 小島　祥美（こじま　よしみ）	
小学校教員、NGO 職員を経て、岐阜県可児市のすべての外国籍児の就学実態を日本で初めて明らかにした研究成果により、同市教育委員会の初代外国人児童生徒コーディネーターに抜擢。愛知淑徳大学交流文化学部教授を経て、2021 年度より現職。文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー。	

7.　次第

時間	内容	発表者／司会
16:00-16:05	本セッションの目的・進行説明（5 分）	司会
16:05-16:35	基調講演（30 分） 「外国につながる子どものことばとこころを育むために(仮)」	櫻井千穂氏
16:35-16:50	国内での事例（15 分）: 「岐阜県立東濃高校（日本語科）の取り組み(仮)」	和田さとみ氏
16:50-17:05	途上国での事例（15 分）: 「ラオスの多民族・多言語社会における学	玉利清隆氏

	校教育の課題(仮)」	
17:05-17:35	オープン・ディスカッション（30 分）	モデレーター： 小島祥美氏
17:35-17:40	閉会（5 分）	司会

8. **議論方法**

オープン・ディスカッション

議題（例）：

- 外国につながる児童生徒の教科学習促進のために学校及び自治体にできることは何か？
- 最低限身に着けるべき技能はなにか？保証されるべきウェルビーイングとは？

以上